

## 松井大阪市長、SSW 人材養成に大号令

大阪市こどもの貧困対策推進本部会議が1月10日、大阪市役所で開かれた。本部長を務める松井一郎大阪市長は、スクールソーシャルワーカー(SSW)の人材確保が急務だとして、オール大阪によるSSW養成の新たな仕組みづくりを指示した。企業にも、社員が社会福祉士の国家資格をとれる体制をつくることなどを求めており、全国をリードする取り組みとなりそうだ。

▶6面に続く

## 一隅を照らす

元旦。西日本新聞の連載のタイトルは「中村哲という生き方」。昨年12月にアフガニスタンで銃撃され、73歳で亡くなった中村哲さん。その郷土(福岡市)出身の医師の「想いを受け継ぐ」新年企画だ。そこに紹介された、中村さんの言葉。「誰も行きたがらぬところへ行け、誰もやりたがらぬことを為せ」。

みちのくの雪に包まれた図書館、山形県川西町の「遅筆堂」。ここでは、追悼展が開かれている(2月2日まで)。郷土出身の作家、井上ひさしさん(1934-2010年)の蔵書約14万冊を収めている。その一角で、井上さんが精読した中村さんの著書が輝く。井上さんがマーカーを引いた一節も、この一文だった。

**< 誰も行かぬから我々が行き、誰もやりたがらぬから我々がするのである >**

2016年夏、日本記者クラブ(東京)で講演した時に、記者に贈った言葉は「照一隅(一隅を照らす)」。

「伝教大師(最澄)の言葉です。我々は、世界中を照らすことはできない。身の回りから、どこでもいから、深いところに入れ。そこには、ことごとく真実がある。そこから何か、真理が見えてくる…」

こう解説した後、「私が知っているのは、九州の一部とアフガニスタンだけ。でもそこを眺める(一隅を照らす)ことによって、他のことも見えてくる」。

2000年、アフガニスタンは大干ばつ



アフガニスタン東部のガンベリ砂漠で水路工事の指揮を執る「ベジャワール会」の中村哲医師。2008年6月。共同

に襲われた。「今必要なのは医療ではない。水だ」。井戸を掘った。治安が悪化しても、「100の診療所より1本の水路を」と微分積分をやり直して土木工学を学び、用水路を建設。砂漠化した大地を緑に変えて農業を復活させ、60万人の暮らしを創った。

中村さんは日ごろから、こう話した。

「信頼関係があること(Trusting Each Other)。それが、武器よりも何よりも一番大切だ」「ネットワークの力は、(国土を占領するようにそびえる)ドでかいヒンズークシ山脈よりも大きく、強い」

昨年師走のXmas。「つなぎびと」の発行の打ち合わせの時、山野則子さん(大阪府立大学教授=右写真)は、意を決した

ように言った。

「1面は、ぜひ、中村先生で…」

脳裏には、中村さんの現場の実践や言葉の重みがあったのだろう。確かに、ソーシャルワークも、目の前の1人を深く理解し、寄り添う



「一隅を照らす」ことから始まる。「信頼関係」で成り立ち、ネットワークをつくる「つなぎびと」だ。

「誰も行かぬから行き」、みんなの命を「つなぎ」続けた中村さん。山野さんの言葉は、その遺志を「一隅からでも生かす」というXmasメッセージだった。

(檸檬新報編集長 平田篤州)

## 新たな潮流

# 「福祉」が、教育現場から 渴望され始めた



長崎大学で基調講演する山野則子さん（2019年11月16日、長崎市文教町）

新たな光が見えた。ローマ教皇が被爆地「NAGASAKI」を訪れる1週間前の2019年11月16日夕。舞台は、浦上天主堂にほど近い、長崎大学教育学部（長崎市文教町）。大阪府立大学教授の山野則子さんの講演の声には、明らかにいつも以上の「熱」が感じられた。「福祉」が、教育現場の渴望の的になり始めた…そう、実感していたからに違いない。

（平田篤州）

## □ NAGASAKI へ

昼下がり。大阪から新幹線と特急「かもめ」で約6時間、JR浦上駅から路面電車に乗り継いで「長崎大学前駅」で降りた。

長崎大学教育学部と長崎大学大学院教育学研究科が主催する「教育実践研究フォーラム in 長崎大学」。その初日の教育シンポジウム「子どもの生活実態から考える学校の役割」の基調講演の講師として、山野さんが招かれていた。

街なかにあるキャンパスなのだが、そこはアカデミックなユニバーシティ。落

ち着いた佇まいの中に、秋色に染まった木々の葉が、陽光にきらめいていた。

## □ 先生、大学生、高校生も

始まる間際の午後1時前、会場の教育工学実験教室11番教室に入った。すると、山野さんが、小走りに駆け寄ってきて小声で話した。

「びっくりしました。今日お集りなのは、主に教育分野のみなさんです」

顔が、少しほころんでいる。大学、大学院、小、中、高の先生、長崎市教育委員会や長崎県教委、長崎県教育センター、各市町教委、教職を目指す大学生や大学院生。そして、市民に開かれた無料の講座なので、地域の人々や高校生も。スクールソーシャルワーカーの姿もあった。

総勢約100人の参加者は、山野さんが長年、手を携えたい、聞いて欲しいと思いつけていた人々だった。

多忙な山野さんに代わって主催者が準備した講演のテーマは、「学校プラットフォーム——教育・福祉、そして地域の協働で子どもの貧困に立ち向かう」。山

野さんが2018年11月に有斐閣から上梓した単行本『学校プラットフォーム』（2600円+税）のタイトルと表紙に書いた文章を、そのまま活かしてくれていた。

## □ 「教育」の仲間に

基調講演の第一声で、山野さんはこう話した。

「私の本のタイトルをそのまま活かしていただいて、ありがとうございます。私は、福祉現場の体験を経て、大学での研究に入りました。研究のテーマも『福祉』です。きょうは、みなさんの仲間に入れていただいて、いっしょに考えられたいいな、と思っています」

みなさんの仲間に…のくだりを砕いて解釈すると、「教育分野のみなさんの仲間になって、つまり、子どもたちの最善の利益を、教育と福祉が手を携えて、いっしょに考えられたいいな」…となる。

そして、山野さんは、きっと「いいな」ではなく「最高だな」と思ったに違いない。「教育と福祉の連携」。それこそが、山野さんが教育・福祉の研究者として、実践者として、心血を注いできたテーマだからだ。



長崎大学キャンパス

## □ 待ちに待った質問

山野さんの基調講演が終わった。長崎大学准教授、小西祐馬さんからの「長崎県子どもの生活実態調査」の発表や、長崎市教育研究所指導主事、法澤光毅さんからの「長崎におけるスクールソーシャルワークの実践」についての報告が続いた。それから、山野さんの基調講演も含めた全体の質疑コーナーに移った。

「その瞬間」は、いきなり訪れた。余裕のいい、元気いっぱい男性が立った。

「いろいろなお話をいただき、ありがとうございました。率直に質問します。どう福祉につないだらいいのか、ヒントを明確に教えてください。子どもたちをみる中で、福祉との連携が必要であることを痛感しています」

男性は、シンポジウムの途中から来場したらしい。進行役の長崎大学大学院准教授の畑中大路さんは、山野さんの講演や登壇者の話の中にヒントがあったことを整理したうえで、最後に山野さんにマイクを繋いだ。

山野さんは、基調講演に加えて、根本的な対策として、教員養成課程の見直しに言及した。山野さんの著書「学校プラットホーム」は、「子ども領域における多職種間連携教育（IPE = Inter-professional Education）の必要性」という項目で締めくくられている。

<これまでの教育カリキュラムでは、福祉や教育、心理など各専門家をばらばらに養成し、学生であるうちに互いの専門性や違いをきちんと学ぶことはほとんどない…具体的に言うと、教員養成課程に心理学科目はあっても、社会福祉科目はない…虐待やいじめ、ひきこもり、貧困などへの対応は、一職種の力では限界がある…心理士や社会福祉士のように、専門職であっても働く場（病院、施設、学校）が広くあるのと違って、教員資格は働く場が教育現場にほぼ限定される…教員免許取得課程に福祉を学ぶことやIPEを取り入れるべきではないか>



福祉との連携について議論する教員や大学生

## □ グループ討議でも言及

質疑応答の後、グループ討議に移った。参加者は10班に分かれた。テーマは「子どもを主語にして、学校でできること、できないことを考える」。その中でも、「教育と福祉の連携」についてふれる声が相次いだ。

「子どもたちの生活態度の育成や、学校を安心できる場にするには、学校（教員）でもできる。そのためには、福祉とのつながりを躊躇してはいけない」

「職員同士のつながり、関連機関（福祉などの社会資源）とのつながり、保護者とのつながり…この3つの有無によって、できることと、できないことが変わってくる。この3つのつながりを、子どもと一緒に育てていきたい」

「できること…気づくこと。（福祉職などの）スペシャリストにつなぐこと。つながりが第一。場所や地域に働きかける」

## □ 福祉分野の教授、初の招聘

フォーラムの準備を進めてきた小西さんや畑中さんは、今回のフォーラムの趣旨について、次のように話した。

「フォーラムは2014年3月に始まり今年で6回目ですが、福祉分野の先生を招聘したのは初めてです。現在、教職大学院では、5つの実習をベースとし

て、各ステージで教師として求められる資質・能力を高めるために教育実践研究を行っています。多様な家庭環境を背景にした子どもたちを見取り、学級経営や授業を行うことは年々、難しくなっています。そこで、文科省や内閣府のお仕事もされていて、子ども家庭福祉分野の第一人者である山野先生においでいただくことにしました」

休憩時間に立ち話をしたとき、「挑戦的な試みでしょ」とも話していた。

## □ 自分のこととして

長崎大学での講演を終えて40日が過ぎた昨年12月下旬、山野さんは大阪府立大学（堺市）の研究棟で、次のように振り返った。

「こないだの長崎大学のシンポジウムでは、先生たちが福祉を『自分のこと』として、落とし込まれていました。名古屋大学教育学部で講義を持つなど2年ほど前から『福祉へのオファー』の動きは感じていましたが、長崎では一歩進みました。我が事として福祉を考える…先生方の意気込みが全く違いました」

今年2月には東京学芸大学に、翌3月には愛知教育大学で行われる学会にも招かれている。新年になっても続く、確かな手ごたえ。山野さんは、さらに加速しそうな「新たな潮流」に、気を引き締めている。

# 子どもの貧困対策大綱、5年ぶり見直し 誰一人取り残すことがない 社会に向けて

子どもの7人に1人が貧困にあえぐなか、昨年11月29日、政府は「子どもの貧困対策に関する大綱」を5年ぶりに見直し、閣議決定した。「日本の将来を担う子どもたちを、誰一人取り残すことがない社会に向けて」というサブタイトルがついている。大綱は、今後5年間、国の指針となる。新春、子ども家庭福祉やスクールソーシャルワーク(SSW)の視点から読み解いた。

(SSW取材班)

## □ 10万件のデータもとに

大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所の所長を務める山野則子教授は、日本子ども家庭福祉学会の副会長を務め、内閣府・子供の貧困対策に関する有識者会議の構成員も務めている。

「大綱は、有識者会議が2019年夏にまとめた『今後の子どもの貧困対策の在り方について』の提言を基盤にまとめられました。私は、2016年度に大阪府下の自治体から委託を受けて行った『子どもの生活に関する実態調査』から、約10万件のデータを得ました。10万件あれば、いろんなことが検証できます。有識者会議では、主に、そこをエビデンスにして、意見を出していきました」

## □ 「子育ての責任は国」

大綱は、①はじめに ②基本方針 ③子供の貧困に関する指標 ④指標の改善に向けた重点施策 ⑤調査研究 ⑥施策の推進体制等—の6分野での構成になっている。

サブタイトルの「誰一人…」は、「貧困をなくす」「質の高い教育をみんなに」「すべての人に健康と福祉を」など17

の目標を2030年までに達成することを目標にした国連のSDGs(持続可能な開発目標)の理念を彷彿させる。

そして、①の「はじめに」の中で、「新たな大綱策定の目的」として、「子供は国の一番の宝」としたうえで、「子育てや貧困を家庭のみの責任とするのではなく、地域や社会全体で解決するという意識を強く持ち、子供のことを第一に考えた適切な支援を包括的かつ早期に講じていく必要がある」と明記した。

子育てや貧困を「社会全体で解決する」とした点は評価する声が多いが、山野さんは昨年12月25日に出版した新著「子どもの貧困調査」(明石書店刊)の中で、「フィンランドのように子育ての責任は国であるという状況を作り出さなければ…」と書いている(8-10面の特集「フィンランド研修ツアー」参照)。

## □ SSWが機能する体制に

スクールソーシャルワーカーは、どのように位置づけられているのか。②の「基本方針」の中で、「学校を地域に開かれたプラットフォームと位置付ける」としたくだけで、次のように書かれている。

＜学校を地域に開かれたプラットフォームと位置付けて、スクールソーシャルワーカーが機能する体制づくりを進めるとともに、地域において支援に携わる人材やNPO等民間団体等が中核となって放課後児童クラブや地域福祉との様々な連携を生み出すことで、苦しい状況にある子供たちを早期に把握し、支援につなげる体制を強化する＞

④の「指標改善に向けた重点施策」の中でも、下記のようにふれている。

＜貧困家庭の子供たち等を早期の段階で生活支援や福祉制度につなげていくことができるよう、配置状況も踏まえ、ス



大阪府立大学スクールソーシャルワーク(SSW)評価支援研究所の山野則子所長

クールソーシャルワーカーの配置時間の充実等学校における専門スタッフとして<sup>ふさわ</sup>相応しい配置条件の実現を目指すとともに、勤務体制や環境等の工夫等においてスクールソーシャルワーカーが機能する取組を推進する＞

そして③の「子供の貧困に関する指標」の中で、全公立小中学校のうち、2018年度に補助事業を活用したスクールソーシャルワーカーによる対応実績のある学校の割合について、小学校50.9%、中学校58.4%(文科省調べ)と数字を示した。今までの指標は、SSWの人数だった。しかし、人数を増やせばいいという話ではない。学校がきちんとSSWを理解し、また、SSWが学校を理解し、機能する体制を作らなければならない。このことも強く訴え、指標が変わった。

一方、スクールカウンセラーについても④の「指標改善に向けた重点施策」の中の同じ項で、＜配置状況を踏まえ、配置時間の充実等専門スタッフとして相応しい配置条件の実現を目指す＞とし

たうえ、③の「指標」の中で、対応実績について小学校 67.6%、中学校 89.0% (文科省調べ) と数字をあげた。

### □社会的孤立

②の「基本方針」の生活支援の項では、「社会的孤立」をとりあげた。

< 貧困の状況にある家庭や子供については、これに伴って様々な不利を背負うばかりでなく、社会的に孤立して必要な支援が受けられず、一層困難な状況に置かれてしまうことが指摘されている。このような社会的孤立に陥ることのないよう、親の妊娠・出産期からの相談支援の充実を図るとともに、子供及びその保護者との交流の機会等にもつながる居場所づくりの支援等、生活の安定に資するための支援を実施する >

### □ひとり親家庭への支援

④の「指標の改善に向けた重点施策」の中で多くの文言を費やしたのが、「ひとり親家庭への支援」だ。有識者会議でも「ひとり親家庭の貧困率が高い水準にある」ことの改善が何度も指摘されていた。

具体的な支援策として、次のような項目があげられた。

▽適切な支援メニューをワンストップで提供する体制▽毎年 8 月の児童扶養手当の現況届の時期等における集中相談体制の構築▽研修等による、ひとり親家庭の相談関係職員の専門性の向上▽児童の思春期に対応する専門家養成のための「思春期精神保健対策研修」▽マザーズハローワークにおけるきめ細かな就労支援▽保護者の疾病や育児疲れ等により一時的に子供を養育することが困難になった場合に活用可能な支援の実施。

### □新指標 14 項目追加

今回の見直しで、貧困の実態把握のための指標を従来の 25 項目から 39 項目に拡充したことも、大きな特徴だ。

指標によると、電気やガス、水道料金の未払いを経験したことがある割合は、子どもがいる全家庭で電気・ガス・水道料金とも約 5～6%だが、ひとり親家庭では約 14～17%に跳ね上がる。

必要な食料が買えなかった体験も、ひ

とり親家庭では 34.9%にのぼる。子どもがいる世帯でも 16.9%という数字が出ている。

そして、ひとり親家庭の母子世帯の親の就業率は 80.8%、父子世帯の親の就業率は 88.1%。ひとり親世帯全体の貧困率は、50.8%にのぼっている。

山野さんは、「こうした項目が追加されたのは、大阪の 10 万件にのぼる生活実態調査が参考になっています」と話した。

新刊



『子どもの貧困調査』  
子どもの生活に関する  
実態調査から  
見えてきたもの』

山野則子 編著  
明石書店  
2,800 円 + 税



新刊『子どもの貧困調査』(下記参照)については、11 面の「実装科学」のページでもふれています。また、つなぎびとでは、「子ども」の表記を「子供」としていますが、政府の文書は「子供」になっており、原稿でも、政府の文書については、そのまま「子供」としています。

## 実態と施策の架け橋に 山野さん編著『子どもの貧困調査』出版

「子どもの貧困対策に関する大綱」は、2014 年施行の「子どもの貧困対策推進法」に基づいて誕生した。今年 6 月に推進法が改正されたのに伴い、大綱も見直された。

この改正推進法で、都道府県の努力義務としていた貧困対策の計画策定が、市町村にも広げられた。都道府県はすべて策定済みだが、市町村では、昨年 6 月時点での策定済みは 145 市町村(特別区を含む)にとどまり、全国にある約 1700 の市町村の計画策定は、これからが本番だ。

そんな計画の礎になるのが、調査研究だ。その意味で、新大綱の発表と並走するように今年のクリスマスに出版された山野さん編著の「子どもの

貧困調査」(明石書店刊/定価・本体 2800 円+税)は、きわめてタイムリーな参考文献だ。

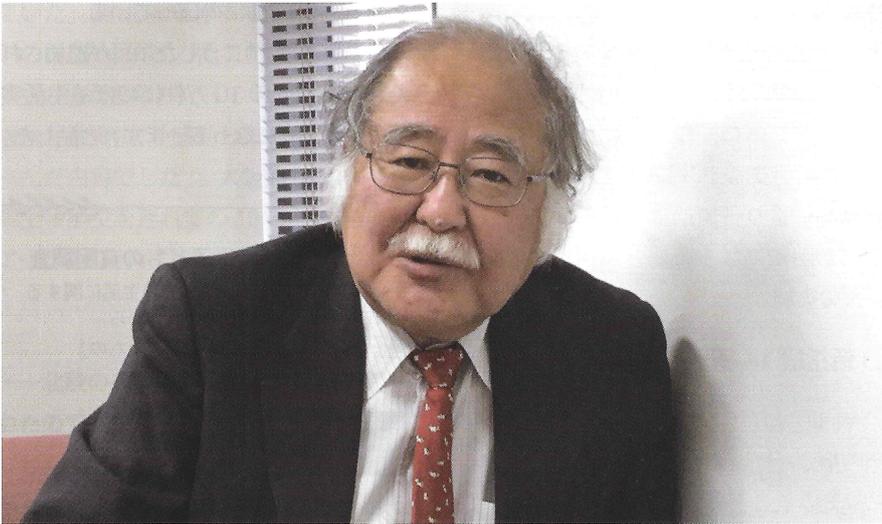
サブタイトルに、「子どもの生活に関する実態調査から見えてきたもの」とある。そして帯封には、「データが示す子どもたちの実態は切実であった」としたうえで、次のように書かれている。

< 本著の目的は、単なる貧困の実態を表すのではなく、調査の意義や方法といった設計部分から地方自治体と研究者の協働、さらには施策の策定・実施・改善まで、データに基づく議論の展開を提示することにある。つまり、調査が実態と施策の架け橋となることを期待している >

新大綱にも、⑤として「子供の貧困に関する調査研究等」の項目が、独立して設けられた。そこには、山野さんの意見をベースにして、< 新たな調査を実施する場合には、単なる実態の記述だけでなく、世帯の経済状況が子供にどのような影響を与えているかという視点を含めて、子供の貧困の実態が明らかになるような調査を検討する。また、政策の効果が生じるプロセスを明確にし、支援が確実に届いているかも含め、取組に対する効果を見るなどのプロセス評価も視野に入れた調査研究を検討する > と書かれている。

# 社会福祉士と精神保健福祉士の活用を

日本ソーシャルワーク教育学校連盟会長、ソーシャルケアサービス研究協議会代表  
白澤政和さん



国際医療福祉大学大学院の白澤政和教授。

相次ぐ児童虐待事案に、どう対応するのか。社会福祉士や精神保健福祉士など福祉専門職養成をリードする国際医療福祉大学大学院の白澤政和教授（70）が、「児童虐待」について話した。

（文 / 構成 平田篤州）

## 痛ましい事件が増えている

児童虐待の件数が増えています。2000年に施行された児童虐待防止法によって、虐待を受けたと思われる児童を発見すれば、児童相談所等へ通報することが全ての国民に義務付けられました。それから、潜在的な事案が顕在化し、そ

れが統計上の件数増加（10年間で約3.3倍）に繋がっている…。それは確かだと思いますが、虐待の実態として、痛ましい事件が増えていることも事実であり、最も気がかりなことです。

## 責任を感じる

私は、日本ソーシャルワーク教育学校連盟（ソ教連）会長と、ソーシャルケアサービス研究協議会（SCS協議会）代表の両方を務めています。ソ教連は、社会福祉士や精神保健福祉士などの養成校（大学、短大、専門学校）273校が加盟する全国組織。SCS協議会は、職能団体

や教育団体、社会福祉系の学術団体など16団体が加盟する福祉・介護のナショナルセンターです。ソ教連も名を連ねています。痛ましい児童虐待が相次いでいることについては、福祉専門職を養成する学校や職能団体に関わる人間として責任を感じています。

## 現実的で即効力のある方で

昨年から、児童虐待に対応するために新たな国家資格をつくる、という動きが出ています。しかし、今やれることは何なのかと考えると、新たな国家資格を設けるより、現在の社会福祉士や精神保健福祉士をさらに『児童虐待の専門職』として養成していくほうが、リアリティーがある。レベルを上げるうえでも、そのほうがよい。質の担保もできます。児童虐待に対応するには、ソーシャルワークが現場でしっかり機能する、社会福祉士や精神保健福祉士が重要な役割を担えるような体制や環境を創っていく、それが大切だ、という立場です。

## 「児童福祉司」は公務員の任用資格

児童虐待に対応する主要な窓口は、児童相談所（児相）です。都道府県や政令指定都市、中核都市に215か所あり、「児

▶ 1面から続く

NEWS

## 「パイ増やさんと、集まらへん」 松井大阪市長、SSW人材確保で発言

会議の終盤だった。大阪市子どもサポートネット（子ども子育て世帯の総合支援体制）を今春（令和2年度）から全区展開することが明らかにされ、スクールソーシャルワーカー（SSW）の人材確保が課題だ—という議論に移った時、松井一郎市長は、身を乗り出すように言った。

「パイ増やさんと、集まらへん。そういうことやね。企業のみなさんにも協力

いただいて、（人材確保を）やろう…」

そう言って、担当部局の市幹部らに、促すようにまなざしをおくった。

1月10日昼前、大阪市役所・会議室で行われた第11回子どもの貧困対策推進本部会議。有識者として出席していた、大阪府立大学教授の山野則子さんは後日、「とてもうれしく思いました。いい意味で、衝撃的な発言です」と振り返った。

## 全24区で展開へ

大阪市子どもサポートネット事業は、学校における気づきを区役所や地域等につなぎ、社会全体で子ども子育て世帯を支える、区長のマネジメントによる仕組みだ。2019年度から市内7区をモデル地区として実践し、今春から全24区で展開する運びになっている。

その「つなぎ」の主要な役割を担うのがSSW。現在、7区役所に8人配置



童福祉司」が配置されています。虐待の疑いの情報を受けて、面接、相談、家庭訪問、一時保護、その後のフォローなどを担当しています。高度な専門性を必要とする仕事です。ところが、「児童福祉司」は、必ずしも福祉の専門職ではありません。任用資格要件を満たした公務員です。福祉とは全く違う仕事をしてきた公務員が異動によって児相に配属されることもあります。研修を受けることなどで、『児童福祉司』となるのです。

### 福祉専門職を育てる

児相で働く『児童福祉司』にしめる国家資格の社会福祉士と精神保健福祉士の割合は約4割です。都道府県によって非常に格差があり、7割を越えるところもあれば、ゼロのところもある。何とかして、レベルをあげなければなりません。レベルを上げる具体策を示したのが、昨年3月にSCS協議会でまとめ、厚労省に出した報告書です。「OJT (On The Job Training= 日常の業務につきながら行う教育訓練) とOFF-JT (Off The Job Training= 通常の仕事を一時的に離れて行う教育訓練) によって、児童虐待のス

ペシャリストを育てる、学生時代、さらには社会人になってからも育てていく、という内容です。

### SSW 教育の認定制度を参考に

ソ教連で行っているスクールソーシャルワーカー (SSW) の教育課程認定制度が、児童虐待の新たな専門職を育てるモデルになる、と考えています。社会福祉士の勉強の上に、4年間で230時間のSSWの専門課程をのせています。座学や実習をオンして、修了した学生に『SSW教育課程修了証』を授与する。全国で現在63校が採用しており、『SSW課程を修了した学生を採用したい』という都道府県や市町村が出てきています。こうした教育課程は、児童虐待の分野にも、すぐに導入できると考えています。

### 認定社会福祉士も有用

SSW教育課程以外にも、方法はあります。2012年からスタートした、認定社会福祉士制度の活用です。社会福祉士の国家資格を取った段階では、スタートラインに立っただけ。卒業して仕事をしながらレベルアップした実践力を認定する、社会福祉士の上級の認定制度ですね。児童・家庭、障害、高齢、医療などと分野がわかれています。児童の中に児童虐待に特化した認定社会福祉士をつくる。そして、一番大事なスーパービジョンを指導できる人材をつくっていく。

これまでに、スーパーバイザーを養成してきています。そんな人材を児相に

派遣できる。このようなプロセスで、児童虐待を根絶していく…これが我々の思いです。

白澤さんは、2019年6月に開かれた超党派の国会議員による「地域共生社会推進に向けての福祉専門職支援議員連盟」の設立総会であいさつし、「児童虐待への対応に係る要望書」を田村憲久・衆議院議員 (元厚労大臣) に手渡ししました。「児童福祉士をはじめ、市町村における子ども家庭の相談援助職に、社会福祉士・精神保健福祉士の必置」を求める要望でした。その後、厚生労働省の子ども家庭局長にも、同様の趣旨の要望書を渡しています。今後、厚労省の社会保障審議会 (子ども家庭福祉に関し、専門的な知識・技術を必要とする支援を行う者の資格のあり方その他資質の向上策に関するワーキンググループ) で議論され、来冬にも、児童虐待の専門職についての報告がまとまる予定です>

### 学校版スクリーニング活用ガイドのDVD完成

大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所は、学校版スクリーニング活用ガイドのDVDを制作した。①スクリーニングシートへの入力②スクリーニング会議のやり方③校内のチーム会議のやり方④支援の実践⑤取り組みの評価などを、映像やイラストで、わかりやすく解説している。

DVDの問い合わせ (山野則子研究室)  
電話・FAX: 072-254-9783  
ebssw@sw.osakafu-u.ac.jp

している「こどもサポートSSW」と拠点中学校10校に10人配置している「教育委員会SSW」を、今春から統合して増員し、「区担当SSW」として各区に学校数に応じて傾斜配置していく方針だ。

同時に、社会福祉士の国家資格を持つ人や福祉現場の実務経験者に担ってもらう「こどもサポート推進員」(任用職員)の人材も確保していく。

### スクリーニング研修がカギに

SSWの仕事としてまず、スクリーニ

ングを学校にきちんと根付かせることが大事になる。スクリーニングは「すべての児童生徒から、気になる子どもをピックアップし、適切な支援や対応に振り分ける」という作業だが、この新しい福祉的な取り組みを実践していくことは、教員だけでは難しい。

大阪市の場合、教職員が参加する「スクリーニング会議①」でスクリーニングシートの内容を共有して課題を抱える子どもを発見。「スクリーニング会議②」で、福祉の視点を入れて具体的な支援

策を決めている。ここで、SSWなど資源が適切につながることになる。

これらをばらばらに行っていた会議①②を合体させるのが、次年度 (今春) からの案である。

山野さんは「スクリーニングの活用については、福祉専門職であっても、理解が進んでいない。24区展開になっていく中で、スクリーニング研修の充実などが、成否のカギになる」と話している。



# フィンランド・ネウボラを訪ねて

—山野則子教授に聞く—



ルスカ（紅葉）が、街路樹に色を添えていた。2019年9月下旬、フィンランドの首都ヘルシンキ。10時間、7800<sup>キロ</sup>の空の旅から降り立って学んだ、現地の福祉と教育に、「感動しました。示唆に富んだ内容でした」。大阪府立大学の研究生や学生を連れての10日間の研究ツアー。山野則子教授に聞いた。

（檸檬新報取材班）

—北欧の白夜の国。どんなところを訪ねたのですか。

私たちが訪ねたところは、白夜ではありませんでした（笑）。ネウボラをまとめている国の機関やネウボラの現場、教職員組合（OAJ）、それに小学校や中学校に行きました。日本の教職員組合は、権利や待遇のイメージがありますが、フィンランドの教職員組合は、政策を提案して国と対等な関係でディスカッションしている。科学者なんですね。組合だけど、研究者。国と近い関係でやりとりしながら、いろんなことを動かしている。教員環境を考えるうえで、「国と近い」ということは大きいと思いました。

—ネウボラについて教えてください。

「身近な相談」といったイメージでしょうか。「町医者」みたいな。（ネウボラは、フィンランド語で直訳すると「助言の場」、「ネウボ」が「アドバイス」、「ラ」が「場」）。おぎゃあ、と生まれてから就学まで…つまり、母親の妊娠期から子どもの小学校入学まで同じ保健師が担当し、あらゆる相談にワンストップで、ずっと応じます。子どもだけでなく、ファミリーの担当です。全市町村が設置、運営している支援拠点で、全国に約850か所あります。約6000人の保健師が働いている、と聞いています。



エスポー市にあるネウボラの保健師（2019年9月）

## ネウボラ

国民皆保険のサービスとして、全家庭に無料で提供されており、健診を行う医療機関です。利用率はほぼ100%。日常の暮らしや育児の相談などのほかに、妊娠中に約10回、産後に15回程度の定期健診や発達相談のサービスもあります。

—ネウボラの保健師は、どこに所属しているのですか。

日本で言えば、保健所。保健所の雇用です。人事異動で、病院とネウボラと学校にいきます。学校（教育委員会）に雇われると、日本のように校長権限などでモノが言えなくなる場合がありますが、ネウボラは学校から独立しているので、ちゃんとモノが言えます。

—日本では保健所の乳幼児健診で、就学前までは子どもたちの状況が「全数把握」できますが、就学後にその仕組みがなくなります。

衝撃的だったのが、その点の認識でし

た。フィンランドでは、その切れ目を「移行期」と、しっかり捉えていました。保健から学校までの空白期。そこを、わざわざ「移行期」と意識して繋いでいく、同じ保健師やソーシャルワーカーがかかわるので、繋ぐことが出来る…ネウボラは、単なる一時的な相談窓口ではありません。ずっと寄り添う、とても優れた仕組みになっていると思いました。

—教員の働き方で感じたことは。

すごい、と思ったのは、「教員は『教員の懸念』を共有する権利がある」という考え方です。いろんなところで、この言葉が使われていました。日本の学校組織においては、仕組みとして子どもの生活上のちょっとした懸念を共有する場はありません。懸念を教員間で共有するのは、問題となって明るみになってからです。教員は、日々、1人でそれを抱え込まざるをえないのです。その「懸念の共有」を、教員の権利として保障しているのです。「悩み事（懸念）を一人で抱え込まずに共有しよう、それは「権利」だ」と…。



エスポー市のネウボラで。

### ——山野先生が、核心的にずっと訴え続けてきたことです。

そうですね。現場で働いていたころ、1994年に堺市で「教師へのメッセージ『ひとりで抱え込まないで』」というキャッチフレーズを掲げて、NPOを立ち上げました。その後、大学の教員となり、研究者（博士）になってからも、そのことを言い続けてきたのですが、フィンランドでは、それを明確に「権利」としている。すごいなあと思って…。教員の体制のバックアップにもなり、上からではなかなかできない仕組みづくりの大きな一歩になりますね…。教員にこの権利が保障されたり、この考えが浸透すれば…。

### ——先生方の心が解放される。



小学校の教室（ヘルシンキ）

日本のいじめ事件の対応などにも示唆的です。千葉県野田市のいじめ・自殺事件（2019年7月）でも、川崎市で中学男子が殺害された事件（2015年2月）でもそうです。現場の先生が「懸念」をだれとどう共有したらいいのかわからずに、心にふたをして大事になる。事件の背景にそんな事実が見受けられることが、非常に多い。たとえば、毎日、給食のパンを自宅に持って帰る子がいる。担任教師としては、すごく懸念していることなのですが、その程度では、児童相談所に話しても相手にしてもらえない。校長に相談しても、「家庭の問題だから」となる。こうして、自分の心にふたをしてしまう。日本の教員は、多忙な業務の中で、すごく懸念を持っています。言っではいけない。言ってもどうにもならない…そうってしまう先生が多い。フィンランドの「懸念を共有する権利」を、しっかり広めたいですね。

### ——小学校や中学校の現場は、いかがでしたか。

すごかったんです。そうそう、これを

言わないと…学校では、「恥の文化」とか「多様性」の点で、すごくヒントになりました。フィンランドは、ずっと学力が世界一で、いまちょっと落ちていますが…。ブレーンストーミングの教育といわれていて、それを実際に見てきて、本当に感激しました。

### ——どんな授業風景なのですか。

たとえば、「夏休み、どんなことがあったの」と先生が問かけると、子どもが、「ヒマワリの種をまいた」と黒板に書く。そこから何を発想するかを促すと、おばあちゃんの家だったので、「おばあちゃん」と書く。じゃあ、このおばあちゃんから何を発想するか…子どもの主体性でどんどん発想しながら、ブレーンストーミングで教育している。どんな科目、どんな場面でも…。有名な教育です。それを実際に見てきて、本当に感激しました。子どもたちは、すわっていても、寝転んでいてもいい。どんなスタイルでも先生は問わない。それでも子どもたちは、授業に集中しています。日本ではまず、すわらせて。聞いていなくても、すわってればいい。カタチから入っていきますが、フィンランドは中身から入っていく…。

### ——なるほど。

スライドに絵が映っていて。雨傘をさしている子どもと猫、先生が「この絵からどんなお話を考えますか」と尋ねる。誰かが発表する。どんどん手が挙がる。発言した子のストーリーの続きをつくる…自分でイメージをつくって発想していくんですね。私たちが見学にいったら、先生が子どもたちに、私たちのことを紹介して、「今何をしているか教えてあげ





て下さい」というと、みんなが「ぼくがわたしが」と手をあげる。

### ——とても魅力的ですが、なぜそんな教育が生まれたのですか？

通訳の方が、教えてくれました。政府の仕事で来日するような素晴らしい方（日本人）だったのですが、その方が「貧困になってしまうから…」と。フィンランドは、大阪府（882万人）よりも人口が少ない国（551万人）で、産業が豊かではありません。冬は全部氷だし、将来の展望を描きにくい。「自立できるようにとの思いを込めた教育です」と説明してくれました。手に職をつけるカリキュラムもありました。溶接、網網、ミシン…。中学生になったら、作ったものを売れるぐらい、精度が高い。考えさせる教育なので、自己管理能力も高くなる。日本では「溶接をしたらやけどする」といって、守ってしまう。全く違いますね。

### ——通訳の方から、いろいろ質問されたそうですね。

フィンランドに来た日本人に、20年前から同じ話をしているけど、日本社会は全然変わらない。若者は、なんで立ち上がらないのか。責任感とか、一人一人の国民意識が低すぎる。たとえば、通行人が横断歩道を渡ろうとしている時は、車は止まる。日本では止まらない。フィンランドは止まってくれる。日本人は、

みんな「やさしいね」と言ってくれるけど、当たり前です。止まらなかったら、交通違反。日本人は、法規制への意識、順法精神が低すぎます…と。

### ——手厳しいですね。

虐待も、通告するのが当たり前。ネウボラのサービスを受けない人はいない。子どもの権利のため、お母さんの権利のために。日本人は、法律の知識が、法的な感覚があまりにもお粗末だ。フィンランドだけが、すごいではなくて、法律は日本もフィンランドも同じなのに、守る意識が違う…そう話されました。ネウボラは国費で運営されていますが、フィンランドでは、国費で給食が配給されているそうです。給食のメニューは、基本的に国民全部一緒。働いている人も、大人も子どもも、みんな同じものを食べている…私も学校でいただきました（笑）。

### ——フィンランドの社会生活も目の当たりにされたのですね。

昨年12月に、新しい首相が選ばれました。世界最年少の国家指導者、34歳のサンナ・ミレリア・マリンさんです。私たちが訪れたのはその前だったので、「若者が就職できない」といった声を聞きました。福祉国家といわれたこれまでのフィンランドとは違う、新たな動きを感じました。女性首相の誕生も、そんな延長線上にあったのかもかもしれません。

### ——今後の活動について。

学校のこととか、チームの在り方とか、組織の素晴らしさなど、多くの学びを得た研究ツアーでした。ツアーの内容は、すでに昨年12月21日に神戸で行われた日本子ども虐待防止学会「第25回学術集会ひょうご大会」などで発表しています。また、昨年12月25日に出版した『子どもの貧困調査—子どもの生活に関する実態調査から見えてきたもの』（編著・山野則子/明石書店刊）（5面参照）にも盛り込みました。今後、いろいろな面で、研究成果を活かしていきます。

## 英国、ロンドンにも

山野さんから研究ツアーの一行は、イギリスにも飛んだ。ロンドン大学や児童相談所をまわり、「実装科学」（11面参照）や「恥の文化」について、現場の息遣いの中で学んだ。

ロンドン大学では、ある教授が「研究者一人では何もできない。企業も含めてさまざまな組織が一体となり、課題の解決に向かって、ディスカッションしながら進めている。研究だけで終わらせない、社会に結実する『実装科学』の立ち位置が重要だ」と話した。

まさに、大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所が日本で行ってきた、スクールソーシャルワークのあり方研究会や文科省、国立教育政策研究所などとの取り組みに通じる考え方だった。

「研究者がおしつけるばかりではダメ。相手を見て、ひきながらちゃんと落とし込んでいく。研究者も、現場を大切にしながら汗をかいているんですね」

山野さんは、こう話した。

## マリン首相、 僚紙「檸檬新報」一面に

弱冠34歳。世界最年少の国家指導者、サンナ・ミレリア・マリン（Sanna Mirella Marin）さんが、檸檬新報舎が発行する季刊紙「檸檬新報」第11号の1面でとりあげられている（写真下）。

<星を見よ、闇を友に…オーロラ（Aurora）観測の極意の一つだ…名称は、ローマ神話の暁の女神アウロラ（Aurora）に由来するという。北欧は今、その女神が美しい。でも、北欧にはもう一つ、話題がある。昨年12月に、フィンランド首相に就任した…>

こんな書き出しで始まっている。マリンさんは、小学生の時、森の伐採に反対して抗議デモをした。地球環境への大人の無関心に切り込んだ高校生、グレタ・トゥンベリさん（17）と同じところがある。トゥンベリさんも、北欧スウェーデンの出身だ。

元旦。オーストリア・ウィーンのウィーン楽友協会で行われたニューイヤークンサートのマエストロも、北欧ラトビア出身のアンドリス・ネルソンス（41）だった。山野さん一行は、「熱い北欧」に行き、「熱い想い」を持って帰国した。



# 全市民の1%超が「見守り応援団員」に 門真市で進む、研究者や市民、企業が一体となった「社会実装」

河内平野に位置する大阪府門真市。人口約12万人の大阪市のベッドタウンが、子どもの貧困対策で脚光を浴びている。人口の1%を超える1300人が、「子どもの未来応援団員」(ボランティア)に登録して、課題解決に努めている。山野則子さんが説く、理念や研究で終わらせない協働成果の「社会実装」が進んでいる。

発進源は、2016年の大阪府の10万人にのぼる「子どもの生活実態調査」。大阪府は、その学びを生かして、2017年度に「子ども未来応援ネットワークモデル事業」を計画。子どもの貧困率が16.4%、生活保護の受給率も大阪府下で2番目に高い門真市を、モデル自治体を選び、2017年10月から本事業を実施している。

「地域の人々の協力を得て、課題を抱える子どもや保護者を早い段階で見守り、支援につなげ、見守るネットワークを構築する」

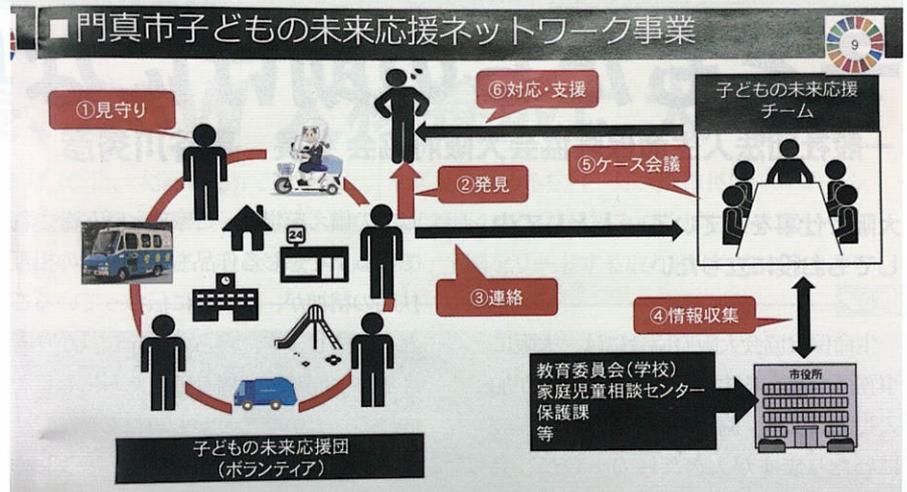
これが事業の目的だ。山野さんら4人の研究者がアドバイザーになった。まず、門真市の「こども政策課」が主導して研修会を開催、「子どもの未来応援団員」を募った。公共施設等で開いても、集まらない。地域の寄り合いなどに、出張研修に出かけた。少しずつ理解が広がり、1年後には1000人が応援団員としてボランティア登録した。登録すると、ピンバッジ(右写真)が提供される。



モデル事業は2018年7月で終わったが、市は引き続き山野さんをアドバイザーとして事業を継続した。その後、登録者は増え、2020年1月時点で、1300人が応援団員になっている。

「平均年齢は55歳前後でしょうか。リタイア後の方も多いですね」

こども政策課の小西紀至さんは、こう



話した。小西さんはこの2年間で、100回近く研修の講師を務めている。

市役所内には、元校長の男性がコーディネーターになり2人のSSWと小西さん、それに6中学校区に2人ずつ配置した計12人の「推進員」と名付けた元教員ら総勢16人で「子どもの未来応援チーム」を結成。現場からあがってくる応援団員の声を選別して週1回、ケース会議を開き、具体的な支援につなげている(上図参照)。

どんな情報があがってくるのか。

**例1** 登校時の見守りの際に、集団登校をせずに遅れて1人で登校している。

**例2** 午前中にもかかわらず、小学生が配達荷物を受け取る家庭がある。不登校になっているのではないかと。

**例3** 孫のクラスに、服装が毎日同じ子どもがいて聞いた。

子どもたちのちょっとした変化に気づき、予防の観点からも見守る。

「登校させることが目的ではなくて、子どもたちの生活実態に着目して、解決の道をさぐる。福祉と教育の連携を、現役のときに知っておくべきでした」と、推進員を務める元教師は話した。

門真市の宮本一孝市長は、「市全体で子どもの未来を応援するまちへ」を公約に掲げている。その言葉通り、小西さん

や市のスタッフは動いた。

その一つがNPO団体と提携した「宿題カフェ」だ。応援団員等が放課後、パン屋やケーキショップなど町のいたる所で「宿題カフェ」を実施し、宿題をみる。そのような中で、子どもたちの変化にも目を配る。

子ども食堂などとともに「夕刻以後の、学校や家庭ではない『第3の居場所』としての位置づけだ。

「予算は限られている。ならば、企業の手も」と市内で自動販売機を展開する企業と話を進めて、自販機の売り上げの一部の寄付が実現。その寄付金を子どもの貧困対策事業に活用している。

このほか、市内の約20企業が、応援団員の登録による子どもの見守り活動や宿題カフェへの物品提供などで連携している。

大阪府は、門真市の取り組みをバックアップし、企業とのマッチングなどの支援を続けている。

広域自治体、市、地域、研究者という、様々な葛藤を乗り越える、新たな協働のモデルづくり。研究者も、調査に続いて施策作りまで伴走する。検証、改善も行う。まさに「社会」に成果を「実装」していく「実装科学」のグッドプラクティス(好事例)になっている。

つなぎびとは、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しています。長谷川秀彦会長から、メッセージをいただきました。

## 子どもたちの助けになりたい

一般社団法人生命保険協会大阪府協会 会長 長谷川秀彦

### 大阪で仕事をしている一人として少しでもお役に立ちたい

生命保険協会大阪府協会には、大阪に事務所を構える生命保険会社24社が加入しています。協会の取り組みは、多岐にわたりますが大きな柱の一つが社会貢献活動です。大阪府協会では、毎年9月に大阪府下福祉施設等支援募金を実施し、毎年2万人を超える大阪の生命保険会社で仕事をしている皆さんから募金の協力を頂いています。歴史は長く、今年度で60回目となりました。少しでもお役に立ちたいとの思いで募金活動をしています。

### 生命保険の役割

生命保険の原点のひとつは、相互扶助の精神です。万一に備え多くの人で支え合う制度です。最近では生前給付のある三大疾病保険など、力強く生きるための保険もあります。

毎年実施している中学生作文コンクール（主催・生命保険文化センター、後援・文部科学省、金融庁、全日本中学校長会）の作品を見ていると、様々なリスクに対

しての備えを学び、ご家族と話しをされている事を感じる作品もあり、この相互扶助の精神が、若い方に伝わっていることを実感します。自らの事をしっかり考える事と同時に、周りの人たちにも目を向ける、大切なことかも知れません。  
※生命保険文化センターホームページに作品掲載中 (<https://www.jili.or.jp/>)

### つなぎびとへの思い

先日、協会に山野先生（大阪府立大学SSW評価支援研究所長）をお招きし、お話を聞く機会を頂きました。子どもたちの置かれている環境は汲々です。いじめ・不登校・貧困など、学校や家庭だけでは解決できない問題がたくさんある事や、それぞれの立場の方が悩みながらも、一所懸命に課題解決に向けて取り組んでおられる事を知りました。

また一方で各々の情報の共有が出来ず、課題解決に支障をきたすこともある事も伺いました。SSWは正に子どもたちが学校や家庭だけでなく、地域社会において横のつながりを持ち、子どもの貧困や様々な課題に立ち向かう正に『つなぎびと』であると思います。

大阪府生命保険協会としても、【子どもたちの助けになりたい】こんな思いで、募金に協力頂いたメンバーと共に、このSSWの役割を多



長谷川秀彦会長

くの皆さんに知って頂くと同時に、大阪府立大学SSW評価支援研究所の活動を応援していきたいと思っています。

### 最後に

大阪府生命保険協会では、少しでもお役に立ちたいとの思いで、1991年から実施している社会福祉協議会への福祉車両寄贈や、20年以上になる盲導犬育成に向けた寄贈等、様々な取り組みをしています。

これからも多くの方々のご理解・ご協力いただきながら、社会貢献活動を続けて行きたいと考えています。

### あとがき

#### とろけるような発想

令和の outliers は、万葉集の「梅の歌三十二首の序文」からでした。＜初春の月にして気淑（よ）く風和らぎ…＞。文学者の中西進さんは、「時あたかも新春の好き日、空気は美しく風はやわらかに…」と書き下しています。

令和の始まりは5月でした。そのせいか令和になって初めての新春、今こそが、まさに「新時代の始まり」という感覚もあります。

白澤政和先生のお話や、フィンランド研究ツアーから、柔軟な、とろける様な発想こそが多様な福祉を生み、新時代を創造すると感じました。（篤）



福祉車両の贈呈式